

# 眞生

第二卷四月號

□先師に別れて私の心は謂知れぬ悲しみに充たされてゐる。忸しい孤兒の悲しみである。

□三月四日の朝三浦の十劫寺で先師の赴報に接した私は未だ電文を開かずして夫れだと知つた、豫て近々ではないかと覺悟はしてゐたが愈々となれば又謂知れぬ悲しみである。

□急ぎ京都に向ふ車中の中でも永劫に老師を慕ふ私の心は一層に強かつた。

□先に兩親を失ひ先年辨榮上人を亡くした私は今又老師と別れて力の抜けた心觸である。もう之から誰が私の非行を呵つてくれるのか。

□世には褒める人と罵る人とは多い。乍然心から私の爲めに眞に呵つてくれる人々としては甚だ少いものである。時々老師に見えた私の嬉しさ偏へに是の温情の光ではなかつたか。

□斯くて五日の朝百山に着た私は老師の靈前に詣て、思はず法弟と共に泣き伏した。止めども無き私の涙、噫、夫れは單なる悲しみの涙では無かつた。オー私の懐しき友人よ(念)。



## 見佛の要求

土屋觀道

客、前回の御話で見佛といふことが私共凡夫にも出来るといふことを知りました。乍然どうしたものか私には左まで見佛した心といふやうな必要も感せず又其の要求も起りませんが夫れでもよいものでせうか。

主、其の點については私にも同感の點が多いのです。乍然夫については餘程の用心を以つて之を語らなければ色々の誤解をかもし易いかと思います。何となれば一體見佛といふことが如何なる意味での見佛であるか一概に見佛といふけれども其の見佛の意義については無量の深さがあるのであつて之については其人々の信仰程度によつて其の趣きを異にするかと思はれます。だから見やうによつて見佛といふことは最も深い宗教生活の根本要求ともいはれるし、又一方には見佛などは宗教の根本要求でも何でもなくて唯だ單なる宗教生活の一面であり又單なる一過程に過ぎぬとも見られるです。

客、然らば如何なる程度が眞の見佛でせうか、又どうしう私共にも見佛の要求が起るのでせう。

主、夫れは程度の問題です。一體如何なる程度を見佛といふか、又如何にして見佛の要求が起るかといふことも其の見やうによつては各方面から之を見ることができなのです。而も其の説き方にも亦色々

あるのです。夫れに就て私が實際に於ける見佛の要求を起した事を反省し、すれば私が夫れを眞劍に求めかけたのは念佛の信仰に入ってから後五年の後です。尤も夫れ以前に於ても尙之を細別すれば私の生活は信仰生活に入らない以前と以後とに分かれたれ、又信仰に入らない以前に於ても信仰を眞に求むるやうになつた以前と以後とに分かれたれ、尙信仰を求むる以前に於ても佛といふ名目や佛像などを見聞せざる以前と以後とに分かたれます。而て明確に此の右の生活の分期點を反省すれば私が何故に又如何にして見佛の要求を起したかといふことが一層明かにされます。乍然斯かる問題は最も詳細を要すべき問題でありますから後日何れの日にか之を詳論することとして今は暫く其の見佛要求の概要をのみ摘出したしませう。

一體私は生れ乍らにして佛を知つていたであらうか、否眞に私の心に佛を知り佛を信ずることが出来たのは近々十數年の事に過ぎず、夫までと云ふものは眞の佛を知らなかつたのです尤も年少の頃郷里に於て私の生家が寺院の近くに在つたので少し物心のつく頃には寺の境内や其の寺としての法事や葬式を見聞して幼稚乍らにも一種の夫れに相當する宗教的氣分は味ふことができました、乍然其の頃の宗教や信仰が決して今日私の考へてゐるやうな又信じてゐる處の宗教や信仰の全分でなかつたことは勿論です、けれども此の間に於て宗教信仰の芽とも云ふべき一種の幼な乍らの信仰心があつた事は事實です、夫に私の村は地方としては可なり有名な神社として氏神が祀られてあり之に對する祭禮などに於て神としての宗教味も加へられたのでした。而て私には可なりな敬神の心も養はれてゐたのでした。此の神と佛とに關する二様の宗教儀式と其の神佛に對する二種の宗教的感興は其の境内に風趣並に之に對する土

地の情風によつて私に二種の宗教的氣分を味はせたのでした。殊に氏神に對する宗教氣分は自然の風俗と共に其の神社を心中とする神聖の氣分を與へ、寺院の私に與へる宗教氣分は寺内では佛像や亡者の位碑並に多くの葬式法要として亡者と墓場との環境が、主として死後の生活死後の未來を意味したやうな消極的氣分を與へ、又時には人生の無情を感じては久遠の彼方寂光の彼岸等を聯想して、彌陀の淨土を戀ふる心も起つたが斯くて、神佛共に謂知れぬ感興を私の心に與へたものでした。殊に神社に於ては神體が見へ無い丈けに反て偶像的感念を離れて、而かも現實に何處にても氏神の加護にあるとの信念に住せられた事もあり、又寺内の佛像に對ては俱對的な丈けに一層如來の人格的宗教味に觸れることも多かつた。尤も時としては所謂單なる木像としてのみに見ゆる時もあつて信がさめる事もあり。又寺の本尊佛を活ける佛の如く感じたり、西方の彌陀と其の淨土とを別の世界に實在するかの感じもせられた事がありました。其他私の家の近くには弘法大師を祭つた眞言宗や藥師を祭つた天台宗があり、或は天神やエベスを祭つた處や御嶽神社などもあり、尙田舎の事とて川祭り三夜待ち六夜待ち、其他地藏や觀音等の祭禮も多く年中の行事の中に行はれた事とて、小供心の私には之等が二々一つの宗教味を一種の宗教經驗として與へてゐます。而て今から思へば之も一種の幼い宗教經驗として捨難い何物かの風趣を與へたことを感じます。

乍然歳をとるにつれて小學校も卒業する頃になりますと私の心には之等の宗教といふ宗教的氣分よりも私の心は漸々と實生活の方面に向けられ、加之是等時代に要求し否要求せざるまでも之等の氣分に温められた私の心は今や之等の環境を捨て、も早や私の心を之に引き留むることができなくなつてしま

ました、尤も夫等の氣分は今も尙今日の村の小供や其の土地の人々には同じく宗教的に感ぜられる事かも知れませんが。夫に私の心には神とか佛とか云ふやうな感じが餘り私の生活には大なる感興を引かなくなり、所謂神社佛閣の前を通る時にも別して心するほどの事もなくて頭を下げて通る位が普通となり、神佛のいますかなど、いふことも餘り心にも留めないやうになつたのです。之に反して私の心が非常な勢いで所謂世間の社會的生活の方面に働き出しました。殊に其の後工業の學校に入りましてからは全々宗教の事を忘れまして、尤も此の以前小學教師をしてゐた頃二週間許りも佛教講習會に通つた事がありますが、其の當時の事は今となつてはさつぱり記憶にも残りませず、唯佛といふ方があると聞かされて佛といふものは果してゐますものか、又何處にゐますものか、否一體佛とは如何なるものであるかと、又我等に佛と云ふ者の必要があるかなど、考へたり、又佛と神とは異つたものだらうかとも考へた事がある丈けはちぼろげ乍らにも今尙ほ覺えてゐます。けれども之とても私の心には單なる客觀的一種の研究的見方に過ぎないのであつて、私自身に於て神の必要だの佛の必要を感じて求むる求道的要求から出た考へでは毛頭なかつたのです。夫位だから私の今世に於ける社會に立つ可き職業選擇に於て機械工業に進む頃には之等のことには寸毫の宗教要求さへ起つて來なかつたのです。此頃は恰度私の十八九から廿にかけての頃でした。今頃の人々にも私のやうなかう云ふ時代の人々も多々ある事です。されば此の學校以前に於ては若し佛とは如何なるものかといふ意味に於て、單なる研究的とはいへ佛を求めつゝあつた事をも見佛の要求といひ得べくは、私は確かに其の頃は見佛の要求があつたとも云ひ得べ

乍然私の今云はんとするところの見佛の要求は之等の意味に於ける見佛の意味ではないのです。然らば

きです。夫は如何なる意味での見物を意味するのであるか夫れには今より考ふれば無量の深さがあるけれども私が心から見佛したい佛にまみえたいと眞に發願するやうになつたのは尙之より數年の後ちです。然らば如何にしてかゝる心を起したか。實を云ふと私は其の初め見佛の要求を起すと云ふよりも寧ろ私自身の生死解脱の要求が本てした。神佛の存在を求むるよりも私自身の不死の解脱を要求したので。而て又如來を求むるといふよりも私自身の意義ある生活を求めました。之に就ては私は今も尙思ふことですが凡そ世間の人々は何を求めてに日々の生活を營んでゐる事ませう。永遠の生命としての不死の自覺と、無限の向上としての價値の生活とが、如來を中心として確立せられざる限り、私共の生活が果してどこまで生きた喜びと望みと力との生活が有得やう。凡そ見佛の要求も又眞實生活の爲めてはないか、此の中心を失つてはそこに何等の意義をもなさないではないか、私は此の意味に於て初めて人生の意義といふものを眞面目に考へることになつたのです。もとより此の間には幾分か大自然の中に生存せる自己を發見し、宇宙の宏大無邊なことや史上に現はれたる偉人の生活や一度過ぎて又と歸らぬ今日の一、さては自然の朝日の輝き夕日の静けさ、春秋夏冬の四季の風光、山川草木禽獸虫魚の無限の展開之等自然の風光も一として驚異の眼で見られないものは無い有様でした。而て之等の中にも人生の五十年殊に私の生活が水泡の如く消え去る事を思へば謂知れぬ淋しさは其の中に現はれ、何故人はに死するのか、我等は何をなすべきかと静かに過ぎ逝く是身の一生を思ふ時、夫が人ごとでなくして自分のことであると云ふ事に氣づいてはどうしても此の苦痛の解決を求めずにはゐられなくなつたのです。之れ私の所謂單なる宗教學者や哲學者によつて満足のできない處であつて此の問題の解決は即ち宗教人として若は哲

人としてのとるべき問題であるのです。而て私の此の解決の要求は自己自身の解決に向ふと共に之と同じ意味に於ける先哲の跡を訪ねざるを得なかつたのです。而して私は此の意味に於ける人生生活の達人を釋迦と孔子とキリストとに於て見たのです。乍然私は之等の人々によつてどれ丈の解決を與へられたのか、彼等は已に永遠の生命と價値の生活とに生きてゐる、而して後人の之等を中心として立つてゐるのも見ることが出来る。而も彼等の心境と私の心境とは其の根底に於て尙ほ相入れぬ所がある。尤も彼等の云ふ處一々私の心を打ち全心彼等に共鳴する處もある、乍然夫は單なる共鳴に過ぎずして彼等は已に解脱の境にあり自分は未だ一分だも其の眞實の靈境に達してはゐない。此の點に於て私の要求する眞の境地は單なる之等先聖の言行にのみ共鳴することではないのであつて之等と等しき人類最高の意義ある生活の體驗者として自覺覺他の眞境に生きんとする要求であつたのです。而も私の現實は此のやるせなき理想要求のあり乍ら、未だ寸毫の手がかりも得ていないことでした。けれども唯僅か乍らにも否むしる大にと謂たいほど、否夫よりも絶對にもと謂たいほど私の心に深く強く私をして望みと力と喜びとを與へたものは之等三聖の人格的生活の風光でした。而して之等が又宇宙の一員としてそこに眞實眞人の生活として此の最高の生活を此の人生の上に體現してゐると云ふことでした。而て私の要求は此の眞人と同じき靈境即ち之を佛界といふか神國といふか淨土と云ふか涅槃といふか極樂といふか天國といふか、其の言葉は其の人の云ふに任かすとして、此の三聖到達の靈的境地こそ即ち私の希念する所の永遠不死の世界であり、無限向上の價値の生活だと信じられたことでした。

然らば是の三聖到達の靈界とは如何なる所であるか、夫は單なる學問や教説によつて知り得べき所

はない、そこは已に言説の境地を絶して自からして到達し體驗すべきの所でなくてはならない。然らば其の體驗の實境及其の實境に到達せる三聖の心境は如何であつたか。斯くて私の心のだとりは單なる人生のたどりにあらずして眞實真人のたどりとして總ての人の生くべき真人の大道をたどりつゝあつたのです。此の意味に於て一人のたどりは萬人のたどりてなくてはならない。而して若し此の境地に到達したものを覺者といひ又如來といふならば自分は正しく自から覺者たり又如來たることを求めてゐる所のものといはねばならぬ。而して夫れは三聖の已に到達せる所であり又私共の到達し得べき所であつて、而かも此の願ひは決して過分の願ひでもなく、又到達し能はざる特種の靈界ではなかつたのです。乍然此の間に於て尙私の心をして強く考へさせるものがあつた。夫れは之等の三聖が未だ斯道に到達せない以前の求道の時代から已に斯道に到達した其の當體の心地と、及び其の靈境の世界から一切の人類に對して顯はれて來る其の自覺の内容であつたのです。之は今も尙私の常に深く興味を以つて探究しつゝ又趣味しつゝある處であるが、私は此の三聖到達の心こそ即ち私の眞實に求むる處の不死の靈境であり價値の世界であると信するのです。

即ち以上の事柄に於て私の當時に於ける眞實の要求は、見佛の要求にあらずして寧ろ之等に到達せる古聖の神境を求め、併せて自分の靈的究竟の解脫地を求めつゝあつたのです。之私が世の輕卒なる見佛論者に對して寧ろ反感をさへ感じて、何の爲めの見佛ぞやと言ひ度いところであつて、徒らに見佛のみを主張する世論に對して心より共鳴することのできない所、眞實に生きんとするもの見佛の要求がそんなに輕々たるものでないと云ふことを、極力主張せざるを得ないところであります。(續く)

## 愛の園圖書館設立の趣意

使子 中野善英

私は一夜ある傳道館へ參りました。初めからひ迄シンミリした信仰談で話す人も涙し、聞く人も涙して、信心を獲お慈悲を載いてゐる人々の心持が其儘溢れ溢れてゐて、何とも云へぬ有難い席でした。處が話が愈々終つて皆がぞろぞろと出て來た時、自分の履いてゐた草履を籠の中へ入れて行く人は極く稀れで、上へ上へと脱ぎ果ねて急いで歸て行く。私は此有様を見てなんだか一度に興が醒めた様な氣がしました。あの有難がつてゐた佛様を話の終ると同時に傳道館の中へ置き忘れて來たのでは無いか、勿體ないの有難いのと唯だ頭の中で佛を弄んでゐる丈けではないか、信心は其塵遊戯ぢやあるまい、白痴の心理状態の様なものではない筈だ。草履の一足位は揃へ、他人の分をも籠の中へ入れてやる所にお慈悲の有難味が惠まれて居りはせぬか、如來様は常に我口をして如來を語らしめ、我手をして如來を行はしめ、我心

をして如來を思はしめられるのぢやないか知ら、いや、そうともしや私には信せられぬと考へられました。私は六つかしい事は知らぬ、信仰ある人の心理と行爲は斯うある可きだとか、其點が少々違てゐるだとか、其塵細かい事は解らぬ。が此頃は悠々と頭の中で如來を考へたり味つたりしてゐる様な餘裕が無くなつて、只管に思ふ事信する事を實現せず居れぬ内心からの勇みを感じます、善く考へられやうが悪く考へられやうが構はぬ。此内から囁く私の如來心を其儘矯めずにグングン伸して行かうと考へます。自我の圖らひで躊躇してゐる時多くは邪まじきものとなるのです。此意味に於て私は今一つの仕事を企てゝゐます。即ち圖書館の設立です。私が此れを思ひ立た譯と云ふのは私が學校に居る頃は餘り生活は豊かでなかつたから十分本が買へなかつた、勿論今でもそうであるが月に本を買ふ金が十圓遊んでゐたらと思つた事は再三ではありませんが、本當に切詰た生活を餘義なくさせられて來ました、かと云ふて買ふ金が無ければ無い程讀みたい本が澤山ある。それで己

む無く図書館へ行く、行ても新刊は極く少なく有ても人が借りて行てゐる、それで苦面して愈々買ふ、買ても一度読めば其後は餘り要を感じぬ本がある。にも係らず生活費を無理して迄買はねばならなかつた、其無理をしてさへ尙ほ及びもつがぬ事を幾度も嘆じました、此等の苦い經驗に沈んでゐる者は日に日に増えてゆくばかりです。此等の人々の爲めに私は小さい乍らも図書館を建てたいと斷然決心しました。

若い者は純な人生問題に又信仰問題に悩みを費す餘裕を最も多く恵まれてゐます、又其等に對し解決を得る悦びを最も多く與へられてゐます。此意味からして學校よりは図書館と教會とが遙かに親しみ易い處です。然し其図書館は少なし、教會は自己宗の押賣所で本當に心の相談所となりて呉れる處は少い、かと云ふて自己流安心では壓へ切れず、眞に惱める青年の寄り附く島は何處にも無い、此遣る瀨ない憂さを晴らす爲めに簡易な宗教図書館を傳道館と兼ねて設けたいと念ふのです。此「愛の園図書館」は藏書數も五百に足らぬ憫めな

ものです、而し宗教、教育、哲學、新刊文藝思想書、社會、美術の書を主とした若い人々へのものであります。

ものは專有してゐるよりも皆と俱に共有してゆく程喜しい事はありません、私は自分の家を自由俱樂部として總ての人と互有して來ました、又光明會館は集る者の共用とした全くの自由教壇であります。

そして此度は私の小私有を舉げて共有し得る事を心から悦んでゐます、そして一人も多く私等の仲間に入つて一冊の本、一錢の金をも抛げ込んで下さる事を希ひます。

私は斯う云ふ話を聞きました。或彫刻家が一の彫刻にかかつた、が貧くて其像を完成する爲めに一品を賣り又一物を賣つて續けて行た。そして最後の一枚の衣迄脱いだ時、裸となると共に飢へと凍への爲めに終に斃れたと。私も其藝術家の蹤を逐ふ一人の宗教人でありたい、私は斯くして私に下された如來からの使命を信じて、勇ましく此發願成就の爲めに進みたいと希念いたします。

## 私の信仰道 (四)

小幡空越

夜は毎晩雪香殿で各聖人の座談會がありました此雪香殿は正面には山越の阿彌陀佛の間もある様な大軸が掛けてあり、其隣には辨榮上人様のお寫眞が据えてあつて、講師様は其左脇前にいつも座られました。五日目の座談は土屋上人でありまして耳四郎の話をして下さいました。私も有難く拜聴して居りました其刹那に一大光明に觸れました。アツ、サーチャイトだと思はず小聲で叫びました。而し二百に餘る會衆は一向何も氣付きませんでした。又フト何心無く正而の掛軸を見ると今迄繪に描いてあつた山越の阿彌陀様が生身の如來様に變りて居られます。紙から離れて山の上に現はれて居られるのです。これはと驚いてよく拜むと御目をしばたつき、私の顔を見ては笑を湛えられてゐられます、雪の中からは天人の奏樂が聞え私は唯々身の置所も忘れて歡喜に充満されました。然し又自分の眼の迷ひでないかと自分の顔を抓つて見ま

したが矢張り生身です。で他の人はと見れば誰も何の感じも無ささそうて私一人が拜み得た丈けらしいのです。私は唯有難くて涙で一杯になり、其夜の話しは一つも耳に入りませんでした。私は其晩は終夜お念佛が申したう御座いました、それがは迷惑だらうと如來様と上人様へ心ゆくばかりのお十念をしてお禮を申しました。

明くる晩も前晩と同じく拜されました。私一人が此結構な身にして頂くのかと思ふと何とも申上げられませんでした。此光明を拜して後は人生の意義が明了になりて來て三世を一貫する自覺を得ました。明る七日は辨榮上人様の御遺骨に對し管長猊下の御回向があり、私達も御影堂へ列しました何心無く大殿を見渡しますと本尊様は數十層倍になつて居られます。内陣の上は實に澄み切つた大字宙であり、實に麗しい身の丈六尺ばかりの自衣の菩薩方が十數人、列を造て下つて見えます。靈體透き徹つて軽く雲の上に浮かばれ、其妙なる事繪にも畫けません。私は身も心も忘れてたゞ夢中であります。段々菩薩方が下られて入口の方へ進ん

で行かれました。何れへお越しかと窺てみました。が終に見る事が出来なくなりました。式が終つて阿彌陀堂へお詣りしますと彼の大きな阿彌陀様は、不思議にもお眼をしばたゞいて私をデーと御覽になり、さも喜びの體で笑ませ給ひました。私はおどろいて唯々茲て死ぬ迄念佛が申して居りたいと感じました。けれ共余義なく皆の人と立つて振り返り振り返り拜み乍ら出かけると、彼の如來様も私の見えなくなる迄を覽になつてみえました。

それより後の私は全く生れ更つて、肉の私は死し靈の上に生れさせて載せました。何とかして此尊き如來様の御旨を皆様にお傳へ致さねばと思ひ顔見る人にお勧めいたしました。却て種々の色眼鏡で見えて居られます、私に徳が無いのか先方に時節が來ぬのか、眞理を傳へ宗義を話しても外吹く風位にししか聞いて下さらず。一人の表具師とよりしか見て下さいませせん。一層僧侶になつて修養し御傳へしたいと志して見ました。それでは無學無識の上に俄僧侶では信用もして下さいませんでせうと考へ、實に如來様に對しては申譯ない

私此小さな私を寸時も休まずに御育て下さつてゐられます事は何と申し上げませうか。本當に嬉しい嬉しい不思議で御座います。最切から私が救はれてあつた事は、アナタを信する事の夫が、若し昔の教のままに現在を否定して未來許りを憧憬させるものであつたならば、私は終にアナタを信じやうとさへしなかつたでせう。然るを幸哉善智識に相遇ふ事を得て現在眞に佛身佛土に證入し而して私自らの救の事實に直接し得べき事を承つて眞劍にアナタを憧憬れ初めました。夫はもう單なる利己一逼の事ではありますが、今にして思へば本當に有難い涙の一で御座います。而して愚か乍らにも道心も起り、出來得るなら謂ふ所の其絶對の寂光土に本佛の如來と直面し奉らんと願ふも熱烈に起つたので御座います。此頃の私は理論としてのあなたを辯榮上人の太靈の光や淨土教教義や其他で概念的には略ぼ諒解する事が出来る様になつて居り、又感情的にも光明遍照の尊神が何となく感ぜられて居りますのでけれども、例の利己的であり而して小局にこだはる癖の私として、眞實

と思ひ暮してゐました。世には宗教屋と云ふ商賣人が多く又營利的信仰家も多いから、同じ者に見誤られても詰らぬ。それよりは自己の修養を勉めてゐます、却て動植物に結縁を志し如來のみ旨の一部を働かしてゐます。其後宅で念佛を申してゐる間でも或は莊嚴のお淨土にあたり一面が化す事もあり、光明を總身に浴する事もあり、或は故上人様を拜したり御尊體に接したり。そんな事は數へ切る事は出来ません。滿一年の間に斯る不思議は無數であり、本然の自證を證得さして載き本當に天地と一枚に成り得たのであります。(續)

## 懺悔錄

(抄) 其十二

演 阿彌

おゝ私の本然の住家にて在まし給ふ如來様よ。嗚呼慕ふても慕ひ切れない私の如來様。私は何處迄も利己的に生れ付いて居ります。而して見解が狭くて大局に目を注ぐ事が出来ず、唯だ極つまらぬ小さな處に許り執着して居ります。此の衰れな

に人生の意義其物に深く深く徹する事が出来ず、唯だ私自身の救を客觀的に求めて居つた有様で極めて低級な御耻かしい宗教意識であつたので御座います。然し乍ら常に私をはごくみ給ふ御恩寵の強き現れが私の上にも終に恵まれる時が乗りましたこそ嬉しさの極みで御座います。

時は大正九年六月九日から拾五日迄の一週間。噫々何と云ふ思ひ掛け無い喜びであつたでせう。實に如來様の御恩寵は凡夫の斗らびを絶した思ひ掛けない處に現はれるのでは無いかとさへ思はれました。實は初め辯榮上人に御願ひしたのでしたが、此頃四國から中國方面を廻ぐられる御豫定で到底行かれぬからと云ふ不思議な御辯理の下に土屋上人へ御懇願申し上げました。元來此催は先師拾七回忌追善の爲に私に因縁ある凡ての方々は何卒此眞實の信仰に共鳴して頂いて共々に此道に進ませて下さいませと云ふのが大體の本願でありました。私自身の上には唯だ私の不徹底の原因たる生温さを鞭撻して頂ければよいので夫以上には何も期待はして居ませんでした。八日に御説になつ

た其夜も

「私はまだ本當に精進する事が出来ません。今度の別時に於ては唯だ熱心に成れと云ふ事を御指導下さればもう其れて澤山です。夫から之は如何でも好い事ではあります。が多少氣掛りですから御尋して見たい事は辨榮上人から云はれた私の明相の事でありますが、私にはどうも一種の生理的現象ではないかと思はれるのであります。と云ふのは他の方は知らず私自身の上に就て考へて見ますと、私が如來様を忘れて居る時でも明相が現するからであります。例へば朝眼が覺めますと直ちに白光を見るのです。そして其次でなければ如來様の事は思出されないので。之は畢竟信仰其物には何等關係のない現象では無からうか。要するに之は古へ人智がまだ今日の如く發達して居りません時一種の不思議さを其處に感じたのでは無いでせうかと存じますが如何でせう。」

一寸御断り致しますが、元來こんな事をくどくどしく云つたり又た色々氣にしたりすると云ふ事は思想の上から云へば随分低級であり、尊い紙面

を汚がす點から眺めても誠に申譯の無い事でありますが暫く御許し下さいませ。事實今も此問題で迷つたり疑がつたりして居る方々もありますし、且つ其當人の身になつて見ますれば二六時中自分にくつついてゐる邪魔物の事でもありまして實はさう直に無關心には成り得ない事なのであります。「イヤ夫れは宗教的現象の明相です。あなたは生理的にしか考へて居られませんか。物事は凡べて一方面許り見るのでは駄目です。一の事を各方面から眺むる時真相がはつきり致します。ですから今の問題も生理的からも心理的からも宗教的からも見ねばならぬので、唯だ單に生理的丈に眺めて、直に否定し様とするのはよくないと存じます。然し夫は左程大問題ではないでせう。」上人の御答は實に徹底的でした。而して私は此時以後余り其變化に心を留めない様になりました。然も此別時中夫が強烈にかり更に別時終了以後、日中不意にピカリツと一二間向ふに白光が輝いて我乍ら驚く事が度々ありましたが、最早そんな物にも誤魔化される事はありませんでした。

偕て一週間の別時三昧會は始まりました。食供養の法事を止めて眞實修養の別時をすると云ふ事に就ては色々批難もあり親族からも抗議らしい言葉が出ました。が私はもう第一日から我を忘れる程に我知らず心になつて居つた爲めか何事も耳に留める事は出来ませんでした。イヤ實は此批難の爲に私は私の修養に熱中したのかも知れません。道場は全部白布で莊嚴されました。御上人は内陣に唯一人、私達は凡て下陣に陣取りました。此白き莊嚴は私自身をも清淨に莊嚴して下すつたのでした。私はもう初めから何時もの私で無かつたので

す。かくて第一日には人生の意義に就て御話がありました。而して如何に生甲斐ある生活が考慮されてあるかを反省させられました。概念としては既に活版で人生の目的と其目的への道と而して今度の別時の私の本願とを一枚摺にして檀家一般に配ばつた様な次第で、理屈丈は不完全乍らも知つて居るのであります。が夫がどれ程深く強く我物と成つて居るか云はれると一寸尻古垂れざるを得ないのであります。前に申上げました彼の大正八年

六月五日朝の一變化以來事實の上に如來様から一日も離れては居ませんでした。が余りに利己的で而して低級で御耻しい事で御座いました。

第二日目には法然上人の求道時代に於ける御話がありました。私は此時初めて我が宗祖が如何に深刻に痛切に私達の爲に御苦勞せられたかを私の今の苦悶に引比べて心から感謝を致しました。

「あゝ私達は宗祖の永い長い求道苦悶の恵みに依つて今日やすやす斯の如く眞實一乘の道がたどられる得るのである。私が今私の不徹底にあきたらずして歎いて居る事は宗祖の其深刻なる御苦悶に對する時、赤面せざるを得ない。私の苦悶は利己一遍では無い。噫宗祖は凡ての人類の爲めに否否な今の私達の爲に斯くの如く惱まれたのである。噫々私達は幸ひなのだ。七百年の昔既に既に今日あらしむ可く準備してあつたのだ。」白狀致しますと私は宗祖に就ては考へた事もなし又實際何とも思つて居なかつたのです。

「宗祖が何た！」

私の心では七百年も前の人の事なぞはよし其人



◎自由俱樂部より

- 愛の園圖書館  
五月開館、閱覽公開歓迎  
送料は當館より拂ひますから圖書の御寄贈を願ひます。
- 光明會館  
毎金曜夜宗教講演開催、來聽歡迎。同水金夜座談會
- 揭示傳道  
御希望の方へは揭示板を差上げます、又揭示文も都度通告いたしますから掲載して下さい。

三縁居士著

新刊 親鸞か法然か

四六版善製 四百五十頁  
定價金參圓 送料十八錢

著者はもと真宗の出、多年煩悶の末、淨土宗に轉じ、更に光明主義に生ける人である。心あらん人々は一讀の價值正に多かるべし。  
一手發賣所 京都(岡崎局區内)  
眞如堂前町六番地

蚊野仙治郎

中國別時念佛三昧會

- 時。例年ノ通り五月一日ヨリ五日マデ
- 所。安藝ノ宮島光明院道場ニ於テ
  - 師。文學士 笹本戒淨上人
  - ◎申込及照會ハ不取敢左記ノ山口縣仙崎町極樂寺内中山法産宛
  - ◎御申込期限 四月二十五日迄  
トス期間内ト雖モ滿員ノ節ハ御届順ニ依リ謝絶スルコトアルベシ。
  - ◎同院ハ大徳以八上人並學信上人開基靈蹟ニシテ風景日本第一ノ優勝景地
  - ◎山陽線宮島驛ヨリ棧橋聯絡船ニテ十五分ニシテ嚴島ニ上陸  
同院迄約五丁
  - ◎切符は嚴島迄御求ノコト

◎別時會佛三昧會

- 講師 土屋觀道師
- 自四月一日朝七時至三日午后五時  
於大阪市南區天王寺生現寺町大寶寺
  - 自四月四日至六日  
於大阪市東區東平野町 貞松院
  - 自四月七日至九日  
於兵庫縣尼ヶ崎大物 圓平寺
  - 自四月十一日至十七日  
於岐阜縣海津郡城山村 行基寺  
(養老線美濃山崎驛下車)
  - ▲四月中の土屋上人傳道日割▲  
十九日より廿一日マデ四日市善光寺  
廿四日ヨリ廿六日マデ靜岡縣清水宮相寺  
廿七日上州高崎  
廿八日歸京  
廿九日茨城縣石下西福寺  
卅日歸京

浄財発第五七号

昭和四十二年四月二十七日

浄土宗財務部長

田

村

信

弘



東京教区

各位 殿

昭和四十二年度教師特別冥加納入依頼の件

新縁の候、上人には益々御清栄の状為宗慶賀に存じ上げます。

貴教区昭和四十一年度寺院等級審査未決定につき、今般教師特別冥加料の

み、宗規第四十五号第四条により昭和四十二年度教師特別冥加料を第十次定

期宗議会に於て定められましたので、宗規第四十五号第七条により徴収令書

を送付申し上げます。出費御多用の折誠に恐縮に存じますが、御清納方何卒

よろしく御願ひ申し上げます。

尚、納期は五月末日と致します。

一般課金・特別課金の徴収令書の等級決定あり次第送付致します。以上